

板倉来衣人¹・平山瑛一²：茨城県神栖市波崎海岸におけるキタオットセイの漂着
 Raito ITAKURA¹ and Eiichi HIRAYAMA² : Northern fur seal stranded on the Hasaki beach, Kamisu City, Ibaraki
 Prefecture, Japan

キタオットセイ *Callorhinus ursinus* は、鰭脚下目アシカ科に属する海生哺乳類で、太平洋北部に分布する。日本近海には冬季から春季に現れ、銚子沖まで回遊することが知られており（小宮 2003）、日本沿岸では北日本を中心に生体あるいは死体の漂着が報告されている（堀本ら 2012；清田・馬場 1999）。しかし、オットセイの漂着事例を報告した文献は少なく、特に近年ではマスメディアによってわずかに取り扱われる程度であり（毎日新聞 2017）、詳細な知見の集積が求められる。我々の知るところでは、2000年以降、茨城県で4例の報告がされている（竹内ら 2015；吉田・国府田 2001）。ここでは茨城県神栖市の海岸に漂着したキタオットセイの1例について報告する。

漂着記録

2014年8月14日午前、茨城県神栖市波崎海岸（図1）の踏査中において、オットセイの漂着個体を発見した（図2）。気象庁観測地点「鹿嶋」によると、午前11時時点で気温27.4℃、北東の風、風速3.2m/sであった（気象庁ホームページ）。

波崎海岸は、千葉県銚子市にあるJR銚子駅から北へ約3 kmに位置する、太平洋に面した海岸である（図1）。この海岸は神栖市の南北に約16 kmに渡る鹿島港海岸の一部で、近海が親潮と黒潮が衝突する潮目に該当するため、セミクジラやマッコウクジラ、カズハゴンドウ等の鯨類（竹内ら 2015）およびハシボソミズナギドリやコクガン等の鳥類（池田・桑原 2013；盛口 2011）、その他にウミガメや南方系の植物種子など様々な生物が漂着することで知られている。

発見時、本個体は既に一部がミイラ化しており、頭骨、右下顎、左右肩甲骨、右上腕骨、右尺骨を確認した（図2, 3）。本個体は上顎頬歯を6対有し、鼻骨最大幅と類して鼻骨長が短く、切歯骨（背側観）中央部の前後径が短かった。これらの特徴から阿部（2007）の記載に従い、キタオットセイと同定した。各部位の計測値は、頭骨長（切歯骨－後頭顆）179.0mm、頬骨弓幅99.6mm、右下顎骨長109.3mm、右肩甲骨背縁長132.4mm、左肩甲骨背縁長131.5mm、右上腕骨長（上腕骨頭－滑車）97.6mm、右尺骨長（肘頭－尺骨頭）118.6mmだった。また、



図1 茨城県神栖市波崎海岸の位置
 (国土地理院地図改変)

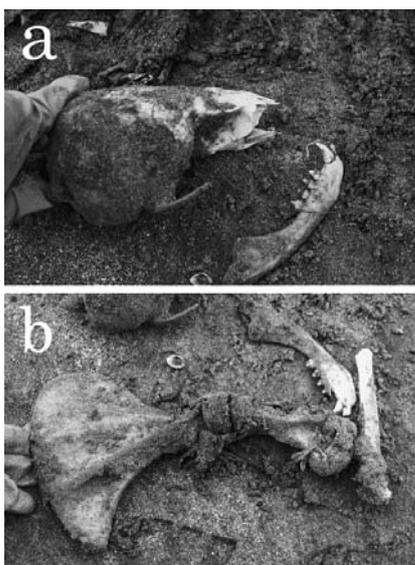


図2 漂着したオットセイ
 a: 頭骨と右下顎
 b: 右肩甲骨, 右上腕骨, 右尺骨



図3 骨の各種類

上顎および下顎の歯列は、永久歯の歯式である I3/2, C1/1, P4/4, M2/1 を示していた (図 4)。

なお本個体の所持は、臘虎臘豚獸獵獲取締法および同法施行規則に定める獵獲の禁止および所持の禁止に該当しない旨を水産庁に確認している (30水管第2898号)。

考察

発見日前日 8 月 13 日は、平均風速 1.6m/s、最大風速 3.2m/s 風向き北、最大瞬間風速 6.1m/s 風向き北、最多風向き西北西 (気象庁ホームページ) を記録している。キタオットセイは、繁殖期である夏季は繁殖島と周辺海域に分布するとされている (加藤ら 2016) が、夏季にも幼獣や成獣が日本沿岸に出現することが報告されている (清田・馬場 1999)。そのため、今回発見した個体は、日本近海を回遊中に死亡した個体が親潮に流されて波崎海岸に漂着したものと考えられる。茨城県への漂着は、2000年 3 月 23 日に死亡個体が 1 個体 (吉田・国府田 2001) と、2010 年に 1 個体および 2012 年に 2 個体の生存個体が報告されている (竹内ら 2015)。そのうち、2010 年の漂着場所は波崎海岸である。茨城県近海は、親潮と黒潮が衝突する潮目であり、漁場として優れていることから、採食に来た個体の漂着例が多いのかもしれない。

発見場所や性別、年齢などの情報は、キタオットセイの回遊特性を明らかにするのに重要であるが、今回の個体の性別は不明だった。年齢については、いくつかの哺乳類種では歯の萌出順序を年齢査定に用いるが、オットセイでは全ての乳歯が胎子期に未発達な形状で萌出し、脱落するため (Kubota and Komuro 1961)、永久歯の歯列を示した本標本は年齢査定することができなかった。今後は、歯の年輪を用いた年齢査定などを行い、本個体の詳細をより明らかにし、漂着したキタオットセイの知見を蓄積する必要がある。

引用文献

- 阿部 永. 2007. [増補版] 日本産哺乳類頭骨図説. 290pp., 北海道大学出版, 北海道.
- 堀本高矩・三谷曜子・小林由美・服部 薫・桜井泰憲. 2012. 2009年冬-春季の渡瀬半島西部から津軽海峡におけるキタオットセイ *Callorhinus ursinus* の来遊状況. 日本水産学会誌 72(2): 256-258.
- 池田雅実・桑原和之. 2013. コクガン *Branta bernicla* の鹿島灘への漂着記録. 我孫子市鳥の博物館調査研究報告 19(5): 1-4.
- 加藤秀弘・中村 玄・服部 薫. 2016. 鯨類海産哺乳類学 [第三版]. 148pp., 株式会社生物研究社, 東京都.
- 気象庁ホームページ. (<https://www.jma.go.jp/jma/menu/menureport.html>. 2018年12月12日閲覧)
- 清田雅史・馬場徳寿. 1999. 日本沿岸におけるキタオットセイを中心とした鯨脚類の漂着・混獲記録, 1977-1998年. 遠洋水産研究所研究報告 36: 9-16.
- 小宮輝之. 2003. フィールド図鑑12 日本の哺乳類. 256pp., 株式会社学習研究社, 東京都.
- Kubota, K. and Komuro, H. 1961. The Calcification of Teeth of the Fur Seals (Roentgenographic examination). *Okajimas Folia Anatomica Japonica* 37(5): 389-419.
- 毎日新聞. 2017. オットセイ新潟市北区の海岸に漂着 ケガ? 海戻れず. (<https://mainichi.jp/articles/20170522/k00/00e/040/181000c>. 2018年11月29日閲覧)
- 盛口 満. 2011. 幼稚園を拠点とした自然教育の試み. 沖縄大学人文学部紀要 13: 83-87.
- 竹内正彦・藤本竜輔・森島和也・安井さち子・山崎晃司. 2015. 茨城県産野生哺乳類目録. 茨城県自然博物館研究報告 18: 71-82.
- 吉田征紀・国府田良樹. 2001. 茨城県に漂着した海生動物-とくに鯨類資料-. 茨城県自然博物館研究報告 4: 109-116.

(Received Apr. 25, 2019; accepted July 5, 2019)

¹ 〒080-8555 北海道帯広市稲田町西2線11番地 帯広畜産大学大学院畜産学研究科畜産科学専攻博士前期課程

¹ Master's Program of Animal Science and Agriculture, Graduate School of Animal and Veterinary Sciences and Agriculture, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine, 2-11 Inada-cho nishi, Obihiro, Hokkaido 080-8555, Japan

² 〒158-0082 東京都世田谷区等々力8-10-1 東京都立大学等々力中学校・高等学校

² Tokyo City University Todoroki Junior and Senior High School, 8-10-1 Todoroki, Setagaya-ku, Tokyo 158-0082, Japan